
現代と幻想を繋ぐ者～短編バージョン～

マッサー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現代と幻想を繋ぐ者〜短編バージョン〜

【Nコード】

N0400R

【作者名】

マッサー

【あらすじ】

さわがしいこと？非日常？そんなのに巻き込まれたくない！
なのにそれは本人の権利なしに起こってしまう！こんな俺が何をした！？

平凡な日常よ、戻ってくれー！！

（前書き）

これは作者がつい暴走して書いた小説です。
よって短編です。

東方Projectの二次小説なのでキャラが何か違う、という可能性があるのでご注意を。

「あー・・・今日も終わった・・・」

俺は疲れたように呟いた。まあ実際に疲れているんだけど・・・。

「毎日毎日疲れるなー・・・」

俺は矢鬼^{やき}。高校2年だ。名字がないのは気にしないでくれ。名乗りたくないんだ・・・まあ確かに俺はこの名前が本当の名前かわからないんだけどね。

俺はどうやら身元が不明らしい。確かに赤ん坊から5歳ぐらいまでの記憶がない。この矢鬼という名前もなんで覚えてたからこう名乗ってるんだけど、正しいなんて保証はない。

自分は一体何処から来たのか、そんなことを考えた時だってあるけど、思い出せた事はない。

「（まああんまり暗く考えるのも、よくないからな・・・）」

とにかく今を生きる事になっている今日このごろなわけなんだけど・・・

「・・・なんか嫌な予感しかない・・・」

俺は学校の帰り道を歩いている。家の食料はまだあるのでスーパーに寄らなくてもいいだろう。だから真っすぐに帰るのだが・・・

「・・・」

俺の家はマンションとかではなく、普通の家での一人で暮らしている。普通とは言ったが、一人で暮らすにはかなり大きすぎる家だ。

「・・・・・・・・」

唐突だけど、俺は面倒事やあまりに非現実的なことは関わりを持ちたくないと思ってる。だから学校生活だって目立つ事は避けてきたのだ。

「・・・・・・・・」

俺は自分の家の扉のノブに手をつける。

だけど・・俺は、高校1年、いや、へたをすれば中学3年、もっと言えばもっと昔から非現実的な世界に関わっていたのかもしれない・・

ガチャ

「・・・・今回は、いきなりはこないか・・・」

扉を開けて家の中に入る。以前あったようなことは何もないようだ。

「（入った瞬間飛び付いて来た時があったからな・・それにまだ安心できない・・・）」

もし今俺が思いついている人物が来ているとすれば、この家は危険な罠だらけになっているに違いない・・

「・・・・・・・・？」

慎重に歩きながら俺はリビングに向かっていくが、罨のような物は何もなかった。

「（いやいや・これはあれだ。何か盛大なドッキリをさせるために静かなんだな。そうに決まってる）」

既に俺は、今日こそなにもない！なんて考えはないようです。

ガチャ

「・・・リビングにも誰もいない？」

しかし先程までの考えとは逆に、誰もいなかった。

「（いやいやいやいやいや・そうやって安心させておいて非現実と行き来できる俺の部屋にいるんだろう！）」

ここまでいくと自分がやけになっているのがわかる。

ガチャン！

「・・・あれ？」

だが今回は完璧に自分の考えが当たらなかった。自分の部屋には誰もいない。出掛けた時と全く同じ、部屋であった。

「ふむふむ・・・？」

冷静になって考える。本当に今日は何もない。

ご飯を食べに来てお賽銭をたかりにきた人、人の所有物を勝手に持

っていつていまだに返して貰ってない人、かつこいいと思うのに時々ブレイクして【うゝ】という人、ご飯を大量に食べにくる人、大酒飲みの人、暇を持て余している人、そのほかいろいろ・・・

そんな人達が今日は本当にいない・・・！つまりこれが俺が望んでいる・・・！

「あー！平凡って素晴らそうかしら？」ギャーーーー！！！！デターー！！！！」

いきなり真後ろから非日常の人物が現れた。しかもその中でもトップクラスな人物だ。

「あらあら、毎回面白いリアクションね」

非日常は俺のリアクションを見てクスクス笑っている。

「・・・何のようですか」

俺はえらく不機嫌な感じで言う。

「つれないわね。せつかくお母さんが会いに来たのに」

「だ・れ・が・お母さんですか！！」

この辺で怒っているようじゃ、俺は目の前の非日常に振り回されているんだな、と思う。

「それにしても、相変わらず【コレ】は持ち歩かないのね」

「当たり前ですよ・・・前に学校に持って行って大変な事になったんですから・・・」

非日常が俺の机に置いてあるカードケースを手にとる。カードの大きさは遊○王よりちよつと大きいぐらいだ。

「残念ね。持って行っても別にいいじゃない」

「よくないです！」

ただでさえあれは俺が頭を抱える事の一つだっていうのに・・・あれ以上変な事になるのは嫌だ。

「言っておきますが、お忍びで来るなんてこと、もうしないでくださいよ？」

「さあ？それはわからないわよ」

俺はため息をつく。素直にしないなんて言う人ではないことはわかってるが、だからこそため息をはくのだ。

「・・・で、何の用ですか」

これ以上話を延ばすべきではないと思った俺は最初の疑問をぶつけた。

「暇潰しよ」

ズコー！

満面の笑みで言われた言葉に盛大にこける俺。なんとなく予想はし

ていたが、これはひどい。

「ひ、暇潰しでここにくるなー!!」

こけた状態のままツッコミをいれる俺。そんな理由で来ないで欲しい。というより理由があっても来ないで下さい。

「じゃあ、息子の様子を見に来たのよ」

「だ・か・ら・！何でそうなるんだー！！！！」

言っておくが俺は黒髪黒目だ。目の前の非日常とは特徴も違う。万が一息子だったとしても、似てなさすぎる。

「ていうかじゃあつて言いましたよね!!」

「はいはい、落ち着いてね」

ナデナデ

本来俺は目の前にいる非日常より背は高い。しかし今はこけた後なので、頭を撫でられていた。

「むう・・・」

これは俺はかなり弱い。何か安心するといつかなんといつか・・・ずっと続けて欲しい、なんて思う時がある。流石に恥ずかしいから言わないけど・・・

「落ち着いたかしら？」

「・・・はい」

撫でられるのが終わってとりあえず頭が冷えたようだ。

「じゃあ行きましょうか」

「・・・」

非日常のその言葉を聞いた瞬間俺は部屋を出ようと移動していた。
だが・・・

バツ！

「ふぉ！？」

見事に俺の行動を読まれていたのか、別の非日常が姿を現していた。

「悪いが矢鬼、これも定めだと思ってくれ」

扉の前で姿を現した内の一人がそう言ってくる。逃げ場がない・・・

「今回は妖怪の山に神社が現れたの。しかも貴方も知っている神社なの」

別に聞きたくないことを言ってくる。俺も知っているというのに少し気にはなるけど、今は逃げる事に専念する。ここから逃げるには・・・
窓！

「じゃあ、行ってらっしゃーい」

バツ！

俺は非日常達の話など全く聞かずに窓から部屋を脱出していた。それほど高くないし、使いたくないが安全な方法もある。

クパア

「・・・・え？」

しかしそう簡単に行かないのが現実であった。落ちようとした場所に入口があったのだ。

「うわああああああああああああ！！！！」

非日常の・・・入口に俺は、また、入ってしまった。

「うわああああ！！！！」

俺は真っ逆さまに下に落ちていく。いくら落ちる事を経験しても、慣れたくないことだ。

ドゴォン！

「・・・・いてて・・・・」

またここに来たのは何度目かわからない。いい加減もう嫌である。そして落ちて来た場所を確認するが、やはり、今までと来た時と同じである。ということは、やっぱりいるんだろうなと、思った。

「また、あんなのね」

「久しぶりだぜ！」

声が聞こえたのでそちらに振り返ると、やっぱり見慣れたくないけど見慣れた人物がいた。

「あんたが来たとなると、また何か起きるのね・・・」

「人をそんな風に言わないで下さい！それと久しぶりじゃないだろ。この前こっちに来てたんだからな、盗みに！」

「借りただけだぜ！」

ほのぼのとした会話を始める。そんなことをするあたり、俺も馴染んだのかもしれない、認めたくないんだけど。

「ま、とにかく・・・」

二人の内、巫女服の少女が笑顔で手を延ばしてきてくれた。

「お賽銭出しなさい」

「そこは違っでしょ！？」

そんなツツコミをいれて俺こと、【八雲矢鬼】は非日常・・・【幻想

郷】に、再びやってきていた。

【続かないよ！】

八雲^{やくも} 矢鬼^{やまき}

地味、もとい平凡に生きたいと思っている。
背はかなり高い。

メガネをかけて隠してはいるが、顔はカッコイイ部類に入っている。
しかしそれはある出来事のせいで学校に広まったので、メガネをかけるのをやめた。

運動能力も本気を出せば凄い。隠していたが、これもある出来事で
学校に広まったので、自重はしているが、それでも学校のトップレ
ベル。

勉強はそこそこ。これは本当。

身元がわからない、人間と言っているが本当に人間かどうか不明。
赤ん坊から5歳ぐらいまでの記憶がない。

5歳ぐらいから10歳程度までは紫や藍が育てていた。そのため、
八雲一家とは既にこの時知っている。

中学3年の夏の時に初めて幻想入りしてルーミアに食われかけて、
自身の霊力が命の危機に暴発して気絶。霊夢に助けられて現代に戻
った。

その後高校1年の時に再び幻想入り。今度は霊夢の力で帰る事が出
来ず、神社に居候することになった。それは紅い霧の異変の少し前
のことであった。

膨大な霊力を持っている事なので半ば強制で使い方を習ってしまい、異変にも関わることになる。物覚えが良いのが幸いしたのか不明だが、スperlカードルールを覚えてしまった。

そんなこんなで紅い霧異変が終わった後、どうやら帰れるので現代に帰って終わった・・と思ったのだが、謎の道具（紫届け）により、現代入りする者が現れてしまう。

【誰にでも好かれる程度の能力】

が、道具と相性が良すぎたのだ。カードは、持ち主（矢鬼）を対象者が信頼すれば効力を発揮する。カードに人物の絵柄が写り、念じれば会話出来たりする。問題点は、強く思えばカードがある場所に現れる事が出来てしまうのだ。

幻想郷の異変にはスキマで強制連行。現代ではドタバタ生活している、矢鬼。

しかしそんな日常も彼にとって当たり前になっていることに気付くのは、もうちょっと先である。

【矢鬼の家・リビング】

矢鬼

「そんなわけで初の短編ということなんだけど・・」

マッサー（フルボッコ）

「・・・・・・・・」

矢鬼

「何でこんな風になってるの？」

紫

「長編のメンバー全員の技を喰らったらしいわよ。まあ当然だと思っ
うけど」

矢鬼

「まあ作者からすればこれは『ただ書きたかっただけ、後悔も反省
もしてない』だから・・・向こうの人達も怒ると思うけど・・・」

「それと先に言っておきますが、カードの能力は恋愛フラグまでいっ
て発揮、ではないですからね！そこは勘違いしないでください！」

紫

「あらあら。恥ずかしいのかしら」

矢鬼

「いらぬ勘違いされちゃ困るんですよ！」

紫

「そうかしら？フラグ一杯建ってるのに？」

矢鬼

「い、いや、あれは、冗談で言ってるんじゃないんですか？皆・・・
タブン・・・」

紫

「最後が片言になつてゐるあたり、認めてないだけね」

矢鬼

「ぐぬぬぬぬ・・・」

紫

「しっかり悩みなさい。まだ若いんだから」

矢鬼

「（絶対楽しんでるよ・・・）」

紫

「さてそれじゃ、

この話はあくまでも短編よ。もしかしたら短編としても続くかもしれないし、長編になるかもしれない。そんなところよ。じゃあまた会える機会があったら会いましょう」

（後書き）

紫

「因みに私も攻略出来るわよ？」

藍

「私も出来るぞ？」

矢鬼

「何処のエロゲだああ！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0400r/>

現代と幻想を繋ぐ者～短編バージョン～

2011年10月7日19時14分発行